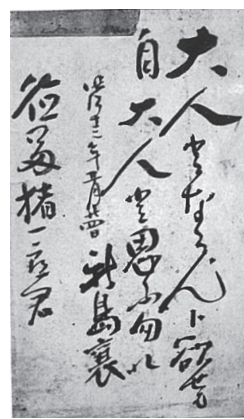


■ 大人とならんと欲せば自ら大人と思う勿れ

平松 讓二（女子中学校・高等学校 教頭）

新島襄はどこまでも神の前で謙虚な人であった。その謙虚さを表すこの言葉は、1880年に同志社英学校を突然退学することになった17歳の徳富猪一郎（蘇峰）に贈られたものである。彼が英学校卒業目前に退学するに至った理由はいくつかの説があるが、その一つのきっかけは、いわゆる「自責の杖事件」である。

キを先導したのが、徳富たち熊本バンドの学生であった。帰京した新島はこの事件を治めるため、礼拝の席で「集団欠席という校則違反は彼らの罪でも幹事の罪でもない。校長である自分の落ち度であり不徳のいたすところである。よって校長を罰する」と、持参した杖が折れるほど手のひらを打ち続けた。



大田区立山王草堂記念館所蔵

新島不在の中、1878年9月に入学した学生と翌年1月に入学した学生とを同じクラスに統合した学校に対して、不満を抱いた学生たちのストライキ事件が発端となった。このストライ

キの後、徳富は新島の説得にも応じず、同志社に見切りをつけたかのように退学の決意をした。この血気盛んな徳富の姿は、校長新島にどのように映ったのだろうか。新島は「大人」となる可能性を十分に秘めた徳富の賜物を見抜いていたに違いないが、弱冠17歳の青年の生意気ともとれる態度には眉をひそめたことだろう。しかし、自身の写真とその裏に祈りを込めて記した「自ら大人と思う勿れ」という言葉は、同志社を旅立つ徳富にとつて、その後の人生の大切な指針として心に刻まれたことであろう。



Doshisha college song

Words by W. M. Vories Music by Carl Wilhelm

One purpose, Doshisha, thy name
Doth signify; one lofty aim:
To train thy sons in heart and hand
To live for God and Native Land.
Dear Alma Mater, sons of thine
Shall be as branches to the vine;
Tho' through the world we wander far and wide,
Still in our hearts thy precepts shall abide!

同志社よ、その名は一つの目的を意味する。

その学徒の精神的、肉体的に、

神のため、祖国のため、生きんという

一つの崇高な目的を。

親愛なる母校よ、同志社の学徒は、

ぶどうの枝のごとくつながりゆくことであろう。

たとえ、世界くまなく、広くはるかに、

われらさまようとも、汝の教訓は、

われわれの心に永遠に生き続けるであろう。

(訳：児玉 実英)